

愛媛県今治市宮窪町における

エコミュージアム化の取組

～今治市村上海賊ミュージアムと NPO 法人能島の里の例を

中心に～

氏名 中原 薫

所属 京都芸術大学大学院芸術研究科研究員

1. はじめに

愛媛県今治市宮窪町（越智大島）に位置する今治市村上海賊ミュージアムは、令和 3 年に今治市教育委員会で策定された『史跡能島城址保存活用計画』（注 1）の中核施設となる地域博物館である。現在、無人島である能島の遺跡発掘や観光施設としての利活用が計画実施されている。

一方で、NPO 法人能島の里は、エコミュージアムを標榜する団体であり、漁港から出発する潮流体験や能島上陸ツアー、地元の名産品大島石の見学ツアーを担っている。

2021 年の修士研究（注 2）にあたりフィールド調査した結果を報告するとともに、今後の宮窪町のエコミュージアム化への取組課題を検討する。

本文中に用いた「地域博物館」については先行研究における定義が必ずしも定まっているとは言えないが、今治市村上海賊ミュージアムが博物館法による登録博物館であり、市町村合併の経緯を経て現在今治市の所管となっていることから使用することとした。伊藤寿朗の地域博物館論に則って使用させていただいていることを明記する（注 3）。

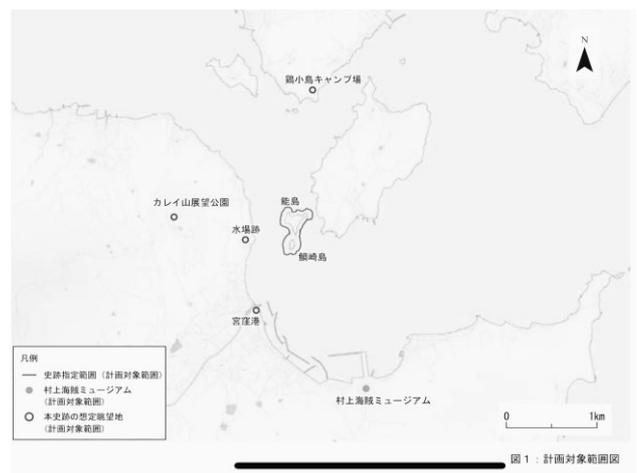


図 1 史跡能島城址保存活用計画対象範囲

今治市教育委員会『史跡能島城址保存活用計画』2020

<https://sitereports.nabunken.go.jp/90728>

より引用

2. 地域博物館の役割

(1) 今治市村上海賊ミュージアムの実践

愛媛県今治市宮窪町に位置する今治市村上海賊ミュージアムは、宮窪町水軍資料館を発祥とし、2004 年 10 月に今治市村上水軍博物館として開館した。日本最大の海賊と称された村上海賊の記憶を肌にかんじることが出来る博物館である。2020 年 4 月に今治市村上海賊ミュージアムに改

名した。日本独自の存在である「KAI ZOKU」を世界へ発信することを目指している。

今治市宮窪町は、能島村上氏が本拠を置いたことで有名であり、町内には今でも海賊衆の遺跡が残っている。代表的な本拠とされる能島城跡には郭跡や岩礁ピットなどの特徴的な遺構が残されている。

能島城跡は 1953 年に国史跡に指定された。愛媛県今治市と広島県尾道市の尽力により 2016 年に日本遺産「“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島一よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶―」を代表する構成文化財に認定された。2017 年には日本城郭協会の「続日本 100 名城」に選定された。

このような場所における「地域博物館」である今治市村上海賊ミュージアムのエコミュージアムに関する取組について学芸員アンケート調査を実施した。質問は以下の 3 点である。

- ①村上海賊ミュージアムのエコミュージアムに関する取組について
- ②日本遺産認定後の変化について
- ③記憶資産としての村上海賊について

メール回答いただいた内容について以下纏めてみたい。

回答①：エコミュージアムを標榜、あるいは意識した事業展開は行っていない。ただ、村上海賊の城である史跡能島城址の保存と活用はミュージアム活動の一体と捉えている。『史跡能島城址保存活用計画』（注 3）には取組の核となる施設として明確に位置付けられている。地域住民との交流では、高齢者教室での講座、まちなか探検学習の支援、地域の文化祭での出張展示等で交流促進を実施。ミュージアムパートナー（ボランティア）制度で約 70 名の登録。ほとんどが地域住民のかたで、展示や能島城跡ガイド、甲冑試着、イベント参加等で活躍。

回答②：近年テレビ等で頻繁に取り上げられ地域住民、とりわけ子供たちの地域の歴史に対する誇りや文化財保護

の意識が高揚した印象。

回答③：村上海賊ミュージアムの活動においては、資料の収集・保管が最も優先すべきことであり、次いでその重要性や価値を明らかにする調査研究、そして、その成果を市民の方に還元するための展示や教育普及活動へ展開させている。伝えるための工夫としてキッズパネルを併設するなどわかりやすい展示を心掛けている。また学芸員が対面でその魅力や面白さを伝える機会を利用。小学校での総合的な学習の時間を利用した見学や遠足、まちなか探検学習などで長年の連携が実り、様々な活動をともにしている。

以上の回答や現地見学から、地域の歴史を保存活用していくことと地域住民との交流を促進していく姿勢が確認出来た。特に例年 2 回程度実施されている企画展では、収蔵品の歴史的価値や新たな発見等が図録に詳細に説明されているだけでなく、観覧者に分かりやすいように展示に工夫が施されていて歴史愛好者を中心にリピーターが増えるきっかけとなると思われる。

（2）NPO 法人能島の里の活動

NPO 法人能島の里は、「豊潤な瀬戸内海の自然の保全・活用を広め、人と自然との調和に努めながら、文化的・精神的・経済的に豊かな生活の確立を図ることを目的とする」と定款に定め、2005 年に NPO 法人として認証された団体である。

ホームページ(注 4)には「潮流美術館―村上水軍が活躍した場」とされており、「潮流美術館は、自然と生活環境の良さを凝縮したエコミュージアムです」と紹介されている。

具体的な活動内容について構想絵図からみていこう。現段階では多くの施設・サービスが構想段階とされているが、15 箇所場所について予定されている。すなわち、

- ①炭火小屋
- ②農園
- ③ミニ牧場
- ④ツリーハウスと海の家
- ⑤観光農園

- ⑥採石見学コース
 - ⑦遠見茶屋
 - ⑧石の茶屋
 - ⑨潮流茶屋
 - ⑩石風呂
 - ⑪遊歩道
 - ⑫展望台
 - ⑬小展望台
 - ⑭広場（キャンプ場）
 - ⑮能島の里
- である。

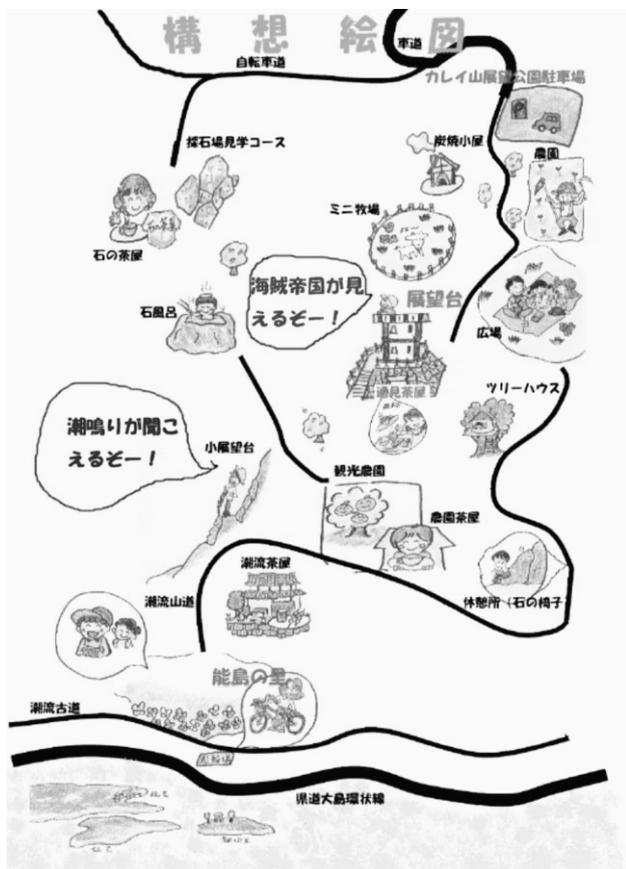


図2 NPO 法人能島の里構想絵図

NPO 法人能島の里潮流美術館ホームページ

<https://noshimanosato.wixsite.com/home>

より引用

2021年11月に⑥採石見学コース（アートキャニオンツアー）と⑦遠見茶屋を見学後、⑮能島の里を見学することが出来た。中核となる建物に行くだけでは分からない地域住民の生活の場所そのものを巡っていくことで、地域の自

然と生活環境そのものを体験出来るツアーである。

これら以外にも「海賊時代の農作物を作る会」が立ち上がっており、行政、企業、個人経営等単体では達成しえない活動を継続している。

現理事長の村上利雄氏にインタビュー調査をしたところ、問題点はボランティア活動者の高齢化・少人数化に尽きるということであった。また、NPO 法人能島の里は宮窪町内における文化資産の調査を愛媛大学に依頼しており、その調査結果については展望台施設に掲示している。展望台を訪れる観光客にも無料で見ることが出来、好評をいただいているとのことである。

(3) エコミュージアム化への展望

今治市宮窪町におけるエコミュージアム化の取組として2つの施設・団体についてみてきたが、これからどのように進展していくだろうか。今治市教育委員会では2021年に『史跡能島城址整備基本計画』(注4)を公表している。

本計画においては、「第四章 整備計画の基本理念と基本方針 第一節 整備の基本理念」が記載されている。次の3点である。

- ①守る、伝える：わが国を代表する中世海賊として、その本質的価値を損なうことなく永く後世に守り伝える。
- ②学ぶ、感じる：本史跡の本質的価値およびそこを拠点として活躍した村上海賊の個性的な歴史・文化をそれらを含んだ豊かな海の自然を感じながら学ぶことができる場とする。
- ③結ぶ、広げる：本史跡を核としてしまなみ海道を中心とした今治・芸予諸島の関連文化財や観光スポットとのネットワークを結び、村上海賊ミュージアムと一体となって、地域間交流に役立てる場とする。

本理念には村上海賊ミュージアムがコア施設として明記されており、「しまなみアートミュージアムオンラインツアーWEB サイト」(注6)が開設された。しまなみ海道沿いに点在するミュージアムは以下の11箇所となっている。

- ①村上海賊ミュージアム
- ②亀老山展望公園
- ③野間仁根バラのミュージアム
- ④大山祇神社
- ⑤伊東豊雄建築ミュージアム
- ⑥岩田健母と子のミュージアム

- ⑦ところミュージアム大三島
 - ⑧大三島美術館 ⑨村上三島記念館 ⑩今治城
 - ⑪タオル美術館
- ①②③以外のミュージアムは大三島、今治市地区であり、地域間の連携というエコミュージアム化の取組である。



図3 しまなみアートミュージアムオンラインツアー

<https://www.shimanamiartmuseum.com/> より引用

また、本計画では「第5章 整備基本計画 第6節 管理・運営計画 (1)関係団体との管理・運営体制の連携整備」において、「NPO 法人能島の里等の諸団体、地元住民とも協働」と明示された。

同計画において、「ボランティア団体の育成支援についても村上海賊ミュージアムのミュージアムパートナーを中心として地元住民の理解を得ながら協力連携をしていくためのボランティアグループを組織していく。」と明示

されてもいる。連携協力が具体的にどのような内容になるかは分からないが、住民理解を得るための方策が模索されていくことになるのではないだろうか。

3. プロトタイプ提案

(1) 概念としてのパーソナル・エコミュージアム

愛媛県今治市宮窪町におけるエコミュージアム化の取組を見てきたが、最も深刻な課題となっているのは、地域の過疎化するなか地域住民の減少及び高齢化ではないだろうか。これからのエコミュージアム化の取組に必要なのは、「ひとつづくり」の場としてのエコミュージアムの位置付けとなる可能性を考え、パーソナル・エコミュージアムをプロトタイプとして提案したい。

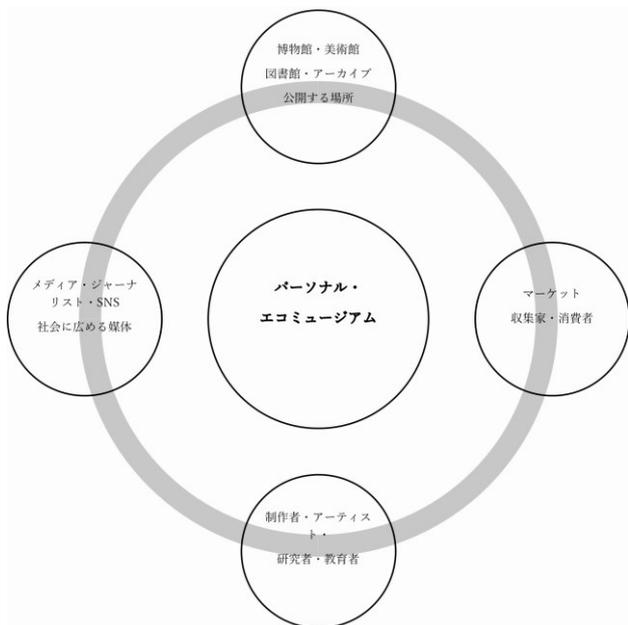
これまでのエコミュージアム化の取組では、行政やメディア・リテラシー等の政治的要因を孕んでいることが多い。インターネットが普及した現代社会では、SNS等を通して個人的活動は容易になっている。行政やメディア・リテラシー等の政治的要因が排除されることにより、

- ①製作者・アーティスト・研究者・教育者
- ②公開する・される場所：博物館・美術館・図書館・アーカイブ
- ③マーケット：収集家・消費者・鑑賞者・観光客
- ④社会に広める媒体：メディア・ジャーナリスト・SNS

というエコシステムの循環のなかに個人起点で組み込まれていくことによる対話体系をパーソナル・エコミュージアムと定義する。

従来型のエコミュージアムでは、②の中で主に地域の野外博物館として位置付けられていた主体は、パーソナル・エコミュージアムでは個人が主体となる。個人の引き出しが4つの媒体と結び付くことにより、マーケットや公開場所、社会に広める媒体、制作者・アーティスト・研究者・教育者との相互理解・働きかけを通して実践者となることが、パーソナル・エコミュージアムの肝となる。

《概念図》



(2) パーソナル・エコミュージアムの問題点

一口に「ひとづくり」の場としてのエコミュージアムといっても、個人と国家の関係、個人と地域の関係が大きく変容している現代社会において実践していくことは容易ではない。フィールド調査時に今治市の居酒屋で何度も聞かされたエピソードでは、公立の進学校で優秀な生徒ほど東京の大学に進学して地元には帰ってこないというのがあった。これは愛媛県に限った話ではなく、都市部を除く全国の都道府県でこれまでずっと指摘されている問題点と思われる。そもそもなんのための「ひとづくり」なのかという問いに対する回答はひとそれぞれ違うのではないだろうか。エコミュージアム研究という観点から述べると、地域の文化資産の継続的利活用になるのかもしれない。ただその地域に生まれた個人が必ずしもその地域に貢献しなければならない訳ではないだろう。今後、修士研究において参考にしたフェリックス・ガタリの三つのエコロジー概念（自然環境、社会環境、精神環境）（注7）や関係人口の概念の先行研究成果を参照にしながら、より具体的なプロトタイプと実践方法を提示していきたい。

注

- (1) 今治市教育委員会(2020)『史跡能島城址保存活用計画』
<https://sitereports.nabunken.go.jp/90728>
(2023年1月14日閲覧)
- (2) 中原薫(2022)『芸予諸島の海民文化-記憶資産とエコミュージアムに関する考察』京都芸術大学大学院芸術研究科芸術環境専攻学際デザイン研究領域修士論文
- (3) 伊藤寿朗(1993)『市民のなかの博物館』吉川弘文館 P155 地域博物館論
伊藤寿朗(1991)『ひらけ、博物館』岩波書店 P23 地域に生きる博物館
を参照
- (4) NPO 法人能島の里潮流美術館ホームページ
<https://noshimanosato.wixsite.com/home>
(2023年1月14日閲覧)
- (5) 今治市教育委員会(2021)『史跡能島城址整備基本計画』
https://www.city.imabari.ehime.jp/sgakusyuu/bunka/hozon_nosima_kihon
(2023年1月14日閲覧)
- (6) しまなみアートミュージアムオンラインツアー
<https://www.shimanamiartmuseum.com/>
(2023年1月14日閲覧)
- (7) フェリックス・ガタリ(2008)『3つのエコロジー』平凡社選書 p10 参照
本書においてガタリは、3つのエコロジー的な作用領域として、環境、社会的諸関係、人間的主観性を挙げ、3つの作用領域の倫理-政治的な接合をエコゾフィーと命名している。